

## 序

学長 齋藤 秀 晃

西暦1999年は、21世紀への胎動を残して音もなく過ぎ去っていった。

世の中では、いわゆる世紀末の不安と同時に、新世紀への夢を膨らませているように思える。

さて、私どもの短期大学も2002年4月に看護大学として、より多くの陣容と課題をもってオープンする夢をもっている。

既に、短大卒業生は566名（専攻科を含む）を数え、地元にしっかりした根をおろし、全国の公立短大の中でも漸く中堅的存在になってきた。それ故、全国公立短期大学協会の運営にも参画するようになり、関東地区15校の学長会議（6月11, 12日）を上越市で開催し、また医療看護系協議会（28校）を新潟市で7月22, 23日に行い、教職員一丸となって、参加校の先生達へのお世話をすることができた。

医療看護系協議会の総会では、各短大の施設利用や、インターネット利用の現状と問題点などが議論され、最後には、経常費補助の復活に係る要望書の確認（文部・大蔵省への陳情）があった。

2日目には学長部会と教員部会に分かれての協議が行われ、所期の目的を全うすることができた。特に教員部会では学生評価のあり方や、単位互換制度の導入などについて熱心な討論があり、大いに傾聴すべきご意見を頂いたと思う。

以上のような各短大での学長や教員の苦労は、或程度は短大生教育での共通の目標への努力の道でもある。公立であることは、その設立母体の如何を問わず、地域に根を張り、地域へその成果を還元することにあると思う。私どもの大学は着実にこの道を進んでいっていると思うし、これからも後退することは許されないであろう。そして、全国でもそれぞれ看護の教育や研究に努力をして、健闘されている先生達との交流も不可欠のこととなっていくであろう。